

「ふれあい」から「吃屹」へ

東京言友会一會員の「個的」伝言板として「ふれあい」を最初に出したのが、八十六年の六月の末でした。それから数度に渡って終刊を宣言しつつも、「私的」と言えるぐらいの「伝言板」になりつつも未だ出し続けていました。それは言友会を離れて動き出すか、あくまで言友会の中で動き続けるかの逡巡だったと思います。

まだその問題には迷いがあります。ただ一人でも新しい道を指し示し歩み始めるしかない、というところで、その一步を踏み出したいと思います。私と言友会の関係はその中で、言友会の方から規定されると思っています。

その一步を吃音者＝障害者解放研究会（反差別研究会）準備会という形で、そしてとりあえずは、その会報「吃屹」の発刊という形で踏み出したいと思います。

さて新しい会の方向性ですが、名前で総てを表現しえていると思っています。それについては次回一号で述べることにして、ここでは「ふれあい」において受けていた主たる批判「一人よがりだ」「難しい」ということを巡って、一言述べておきたいと思います。

「ふれあい」には2種類の性格の文章を書いていました（勿論一つの文章の中に二つの性格を持たせることもあったのですが・・・）。自分の感じることを表現するという文章と、吃音者問題を主題にした理論的な文章です。そしておそらく「批判」は後者に向けられると思います。

言友会にきて私が感じたのは、理論的な話し合いが成立しないということです。そして理論的な話し合いを好む人が、「為にする論議」をしかけているということです。「為にする論議」というのは、「論議」を楽しむとか、もっと言えば、自分が知識を披露することによって他者から尊敬されたいとか、他者を論破して優越感を味わいたいとか、そういったところでなされる論議のことです。例えば、今の社会の情勢についてとうとうと述べる人で、その社会をどうしていくかという視点抜きで、単に知識の披露というところてしか語っていない人がいます。また本を読むとき、ただ本を読んだいうために、本を読んでいるのではと思われる人がいます。そして確かにこのことの中に抑圧されてきたが故に自己主張したいという、その人の吃音者としての影が読み取れるのですが・・・。

断り置きますが、私の中にそのような傾向が全くない、という積もりはありません。だが、私自身そのようなことは自己点検しているつもりだし、私の中では、常に運動の為の理論という目的意識性の中で理論を問題にしていると思っています。

私の文章が「為にする論議」としてとられるというのは、理論的なぶんをオブラートに包み読みやすくするという「策を弄し」、自己表現的文で理論を展開しようとした、ということがあったために、誤解を招いたのではと、今の時点からとらえ返しているのですが、・・・。

「むずかしい」ということにかんしては、私の表現力のいたらなさということがあるるにせよ、そして二・三の草稿としての位置付けがある例外的な文以外は、その「むずかしさ」は常識という形の固定観念へのとらわれのためではないかと思うのです。すなわち知識がないからむずかしいのではなく、知識があるからむずかしいのだと思います。そして

今度はそのとらわれから脱するために、自らの固定観念に揺らぎをもたらす為にも理論が触媒的に必要とされるのではないのでしょうか。

さてもう一つ、私がなぜ「理論」ということにこだわりつづけるのか、ということについて書いておきたいと思います。私の人との出会いの中で、自分の体験と感受性の鋭さで、事象を的確にとらえ簡単明瞭に表現する人がいます。そして私自身もそのような簡単明瞭なことで思想的転換がもたらされ、自分の思想的核心が形勢されたという思いがあります。だが、経験が経験として吸収されたというのは、無自覚的であれ一つの理論化だと、思いますし、いわゆる感性が鋭くなるということも、無自覚的であれ理論化との相互媒介性があるのではと、思います。だから、問題は目的意識的理論化の必要性はあるか？ということだと思います。

私はその必要性を三つの形で示しえます。一つは、問題をより根底的にとらえることに果たす理論の触媒的役割。もう一つは、自分の直接的問題ならとらえきれることが、直接的問題としてにとらえきれないことに関してはことの「本質」ととらえられないこと。そのことの飛躍への理論の果たす役割。また一回はとらえたことを、2度目はとらえきれないということが起きる、そういった繰り返しを回避するための、蓄積を蓄積としてなすための理論の果たす役割。最後には、そしてこのことに総てが通じているのだと思いますが、理論は運動の方向性を見いだすための理論であること、そして蓄積していく運動の方向性を見いだすということにおいて理論が不可欠であること。

理論とは実践—運動の為の理論であり、運動とは現実の矛盾の解決としてある、そのようなところで理論をつかみたいと思っています。

(後記)

吃音者宣言の批判は会内的批判として行いたいという思いで、シリーズの として文を興しました。もっと早くから文案は暖めていたのですが、「吃屹」の創刊号の中に織り込むという意図ももっていて、「ふれあい」の反応の終末を確認してからということで、押さえ込んでいました。「吃音者宣言」推進者サイドからの反応を期待して、「ふれあい」が続く余地ということも考えています。ただ、「吃音者宣言」推進者は実践をもって示すという風で、今までにその根幹的なことで反論が出てきたことはなかったし、他の言友会の人達からも反応が返ってきそうにもありません。もう私サイドとしては「吃音者宣言」の批判は根幹的なことでは出しつくしたという思いです。

本文でも書いたように、吃音者の問題を掘り下げている過程で問題になる「差別」ということを、長年私が抱えてきた宿題として文章化するということを織り込みながら、新しい形で、根源的に総体的に、「吃音者問題」を論じたいと思います。言友会会員としての制約を振り払って……。本文にも書いたように、私の理論はあくまで実践のための理論です。「吃音者問題」の解決のための方向性を示すこととして、そして実践へ踏み出すこととして、「吃屹」の発刊に踏み出したいと思っています。

今回の文を書くにあたっては分かり安くということを心がけたのですが、色々溜めた思いもあり、かつ次へ継なげるということで先走ったりして、なかなか分かり安い文を書くことができません。「ふれあい」の数少ない読者の方々には、反応のしようもない文章にもかかわらず、長らく付き合い下され、有り難うございました。

できますればその辛抱を「吃屹」へと継ないで頂き、共に感じ、共に働き掛け合い、その中から何かを生み出せればと念じています。

ふれあい 百九号一第一次公刊終刊号

（「吃音者＝障害者解放研究会（反差別研究会）準備会」会報「吃屹」〇号）